

昔の洪水の記録から、地域の災害特性を知ること

江戸



背景

肱川には、大洲藩主の加藤家が元禄元年（1688）から万延元年（1860）の172年間にわたって、水番2人を置いて交代で昼夜水位を観測させた記録が残っています。この中で最大の水位を、文政9年（1826）5月21日の大洪水で記録しており、三丈三尺一寸（約10m）に達しました。この話は、この時の洪水の様子を描いたものです。

水位観測はその後、愛媛県や国に引き継がれ肱川には300年を超える水位の記録が残されています。

アクセス 大洲城

- JR伊予大洲駅より南南西へ直線距離約1km
- 大洲市大洲903
- 緯度経度 北緯33度30分34秒, 東経132度32分39秒



大洲藩の記録で肱川の水位が大洲で最大を示した文政九年（一八二六）の大洪水の時のことです。この年五月二〇日より雨がしきりに降り出し、翌二一日にはさらに大雨となり、あたかも車軸を流すようになりました。夕暮より川の水がにわか増加し、堤が二ヶ所崩れ、水が溢れて三里に一里の広野が海のようにになりました。前代未聞の洪水です。大洲城の東にある燕門という見上げるほどの大きな門に洪水が渦巻いて、とびらが二枚とも流れてしまいました。土地が低い所では、水に浸かった高塀の上を自由に舟が乗り越えるほどでした。

中町の川寄屋という酒屋は昔の丑寅の洪水のことを考えて石垣を高くしましたが、今度も水浸しになり、家財をすべて濡らしてしまいました。長門屋という酒屋では蔵の酒桶が傾き、下人が残らずこれにかかり切りになり、晝はもとより衣類、道具、そのほか多くを水に浸し、脇差七〇腰が壊れました。大事な時なので、翌日から役所に出勤しなければいけないのに、脇差がないので徳の森屋という所で借りることになったそうです。塩屋町の松屋という紺屋（染め物をする家）の打盤（衣類を棒でたたいて柔らかくする木製の台）は、長門屋の茶の間に流れ込んでいたので、後で四人がかりで引き取りにいきました。奈良屋という門屋（女子などが住む小屋）は居宅も蔵も壁が崩れて破れ、あらゆるものが流れ、客も家の者もようやく逃げて、命が助かる有様でした。

こういう状況ですので、みな二階または屋根の上において、のどが渇いても呑み水もなく、男子は窓から小便をし、汚いこと極まりない状態です。家ごとに壁が崩れ落ち、囲いもまばらなり、油も切れ、灯心もなく、盗賊が徘徊する始末です。犬は水が増すにしたがい、屋根の上に登り、水が引いた後、下ろしてやる人がいないため、屋根の上をはい回り吠えていました。